

# 国 問

## 国 語

平成二十六年 度

### 注 意

- (1) 「解答はじめ」というまで開いてはいけない。
- (2) 問題は一冊(本文十ページ)、下書用紙は一枚、解答用紙は三枚である。下書用紙は問題冊子の中にはさみこんであるので引き抜いて使ってよい。
- (3) 全部の解答用紙に受験番号を書くこと。受験番号は次の要領で明確に記入すること。

(例) 受験番号 5001 番の場合

5	0	0	0	1
---	---	---	---	---

- (4) 解答は解答用紙の所定の位置に書くこと。他の所に書いても無効である。字数などの指示がある場合は、その指示に従って書くこと。解答文はたて書きとする。
- (5) 解答用紙の余白は採点者が使用するので、誤字脱字の訂正のほかは使ってはいけない。
- (6) 書き損じても、かわりの用紙は交付しない。
- (7) 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰ること。

問題一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

幸福という言葉はいまはうるんな言葉だ。耳にしてそらぞらしく、口にしてためらわれる。あてにならない。歯ごたえある確かな言葉としてかんじられない。気のきいたやりかたで言葉をロウヒ<sup>A</sup>にする。そうしたロウヒによってだいなしにされてしまった言葉だ。そのため手にうしなわれた言葉である。幸福という言葉をつかってものをかんがえてゆく。思考のそうしたみちすじが、いまは容易にみいだしにくくなった。

幸福という言葉は今日、確かにだめな言葉である。それは生き生きとしたどんなイメージもカンキ<sup>B</sup>しない。けれども、幸福という言葉を始めにすることで、今日に何かがみうしなわれてしまったということも確かだろう。一つの言葉が手にうしなわれる。そのときみうしなわれるのは、ただ言葉だけではないからだ。その言葉によって生きられるような生きかたもまた、みうしなわれる。幸福という言葉のみうしなつて今日にみうしなわれたのは、幸福という言葉でしかないあらわせないような屈託<sup>A</sup>をもった生きかた、だろう。

幸福は「しあわせ」として読まれるのが、いまは普通である。「いまは幸せかい」「ぼくア幸せだなあ」「幸せなら手をたたこう」というふうに、しあわせとして幸福は信じられてきた。しあわせであることが幸福なのだ。しあわせは仕合わせだろう。めぐりあわせ、運だ。運がむく。運がいい。しあわせは、しあわせかふしあわせかが、問題なのだ。「いいじゃないの幸せならば」だ。他人はかわらない。しあわせとしての幸福は、個人の出来事だ。

だが、そうだろうか。幸福はしあわせということだろうか。幸福をたやすくしあわせと読んでいる今日、うしなわれたのは幸福を「さいわい」と読む意識だ。しあわせ、さいわい。どちらの読みようが正しいかではない。何でもない読みようのちがいにみえて、しあわせととるか、さいわいととるかで、幸福のイメージのつかみかたは分かれる。はつきりちがつてしまう。けれども、幸福がさいわいとして読まれることがなくなつたいま、さいわいとしての幸福のイメージがどこかへみうしなわれてしまった。そのことをかんがえるのだ。

幸田露伴に『文明の庫』(明治三十一年、一八九八年)という文章がある。子どものために書かれた文章なのだが、露伴の文章でもっとも好きな文章の一つだ。その緒言で、露伴は幸福について書いている。

「人間のものは必ず人の手によりて造り出されたるものなり」「人間の幸福は必ず人によりて造られたるものなり」。

人間には「ひとのよ」と、幸福には「さいはひ」とふりがながある。人間の幸福は「ひとのよのさいはひ」なのだ。何か特別なものではない。日常を日常として、フダンに明るくしているもの。それが「人の手によりて造り出されたる」さいわいとしての幸福だろう。

「ひとのよのさいはひ」は、目立たずありふれてみえる。しかしそれは、よくみれば、彩糸いろいとでかがられた毬まのようなものだ。

「何人かの頭の中の考へより出で」「何人かの手の中の手力より出て来りたる」さまざまの糸によつて隙間すきまなくかがられた毬である。

「一時一世にして」「たちまちに成つたものでなく、それは「少しづつ少しづつ人の造り出したる幸福の聚まりあつり積りて成れる」ものだ。

人間の幸福はそのように、人びとの日々の仕様をつくりささえてきた工夫の歴史から成っている。人の世のありようのおよそ根本のところにあるのは、そうした幸福の経験だろう。幸福はありふれたものだから、それはなくてはかなわぬものだ。

二十世紀の**とばくち**で書かれた『文明の庫』を読みかえすと、今日しあわせという言葉で了解される幸福のイメージが、露伴のたどつた幸福のイメージといかに遠くかけちがつてしまったことが、いまさらにかんがえさせられる。時代はとうに変わっている。異なる二つの幸福のイメージのあいだには、二十世紀のへてきた戦争と技術の時代の推移がおおきな溝をあけている。けれども、幸福についていえば、おおきくまわつて変わつてきた時代の**ナイジツ**は、さいわいという言葉のみうしなつて、ただしあわせという言葉をのみ得てきただけだ。そうとしかいえないのではあるまいか。

さいわいへの想像力。『文明の庫』の露伴はそれをかなめにおいて、歴史というものをみた人だ。日常のなかにあるあたりまえのものをゆつくりとみることをおして、歴史を日常の歴史、さいわいの歴史としてとらえた。日常にあるあたりまえのものは、日常の用を足すものであると同時に、人びとが日常にあらわしてきたさいわいへの想像力の記録である。日常をよく生きるために人

びとがはらってきた「周密こまかなる心づかひ、鋭き智慧」の文明史が、さいわいの歴史なのだ。

歴史を「俊傑」のいる風景として、戦史、権力史として語って、「古人の正しくて剛よき精神の徳」をたたえる。歴史は一般にそのように語られやすい。「古昔の人の正大剛明の精神」をおもふことが、「今ここに我等の、茶碗ちawanを有し、綿わたふらねるを身（性）につけ、蒟蒻こんじやくを口に上ずを得る」ことについてかんがえるより、上等にみえるからだ。しかし、ちがうのだ。歴史の紙のうえに「俊傑」のフンボをかぞえていっても、人びとの生きた日常の歴史はみえない。さいわいへの想像力をじぶんにもつことができなければ、「誰にもみえていて誰もが見ていないものを、はつきりみえるようにすることはできない。」

「戦史は争闘の史なり、文明史は幸福の史なり。戦史の上にはフンボの大なる人いたづらに多し、文明史の上には長く死せずして働く人多し、戦史の上には今も我等に影響を与へざる人多し、文明史の上には今の我等に徳沢とくを遺つせる人多し」。

露伴はきつぱりと書いている。

「まことに文明史は愉快の書なり」「文明史の裏面は直に踐ふむべき道義の教訓なり」。

『文明の庫』緒言は、同時代を先んじて生きたイギリスの思想家ウィリアム・モリスの『民衆の芸術』（一八七九年）をおもいださせる。モリスが「芸術」という言葉をおいたおなじ場所に、露伴は「幸福」という言葉をおいたのだ。幸福は *art* であつて *happiness* ではない。

幸福という言葉はいまは「しあわせ」になつた。人間もまた「にんげん」になり、その言葉から「じんかん」「ひとの上」のイメージはみうしなわれた。『文明の庫』の時代からは遠く、環境が変わり生活の様式がうつつた時代に、しあわせという言葉は、いわゆる大衆社会が採用したほとんどただ一つのイデオロギーの言葉になつた。そして信じにくくうるんな言葉になつた。たやすく消費される言葉ではあつても、だめな言葉でしかななくなつているしあわせとしての幸福という言葉は、今日という時代を、一語でみごとに語っている。<sup>三</sup>さいわいなしのしあわせ時代。二十世紀の子どもたちへのおくりものとして書かれ、いまはわすれられている露伴の言葉がおしえてくれたことだ。

(注) ふらねる 柔らかい起毛織物。フランネル。

問い一 傍線A・B……Eを漢字で書きなさい。

問い二 傍線ア「屈託」・傍線イ「とばくち」の意味を簡潔に答えなさい。

問い三 傍線一「幸福という言葉をつかってものをかながえてゆく。思考のそうしたみちすじが、いまは容易にみいだしにくくなった。」とはどういうことか、簡潔に答えなさい(四〇字以内)。

問い四 傍線二「誰にもみえていて誰もがみていないもの」とは、どういうことか。簡潔に答えなさい(五〇字以内)。

問い五 傍線三「さいわいなしのしあわせ時代。」とはどういうことか、簡潔に答えなさい(五〇字以内)。

問題二 次 of 文章を読んで後の問いに答えなさい。

教師は一人たる義務の外、又<sup>ア</sup>学士たるの義務あり。而して此義務は大に其童子を教育するの本務に關係を有するものなり。何をか学士の義務と謂ふ。曰く学芸の爲め心身を勞するこれなり。夫れ学芸の進むや之を撫育養成する者ありて而して進むなり。豈に独り自ら開展發達するものならんや。是故に学芸は人を待て進達し人は学芸に倚<sup>よ</sup>りて聰明なり。抑も学芸の類亦多し。其善く完全備具して欠くるなきものは未<sup>いまだ</sup>嘗てこれあらざるべし。故にニウトン氏<sup>注</sup>老後歎じて曰く、嗟乎学海の広且大なる洋々たる大海も畜<sup>たく</sup>ならず何処にか其の界限を見るを得ん、余纔<sup>わづか</sup>に其浜沼に達し水を涉<sup>わた</sup>りて貝殼の美麗なる者二三を拾得たれども未だ渺<sup>びよう</sup>たる滄海の底に何物のあるを知らず、水蕩々として余を遮り舟の以て航すべきなし、嗚呼余今將に此を去らんとす、誰か能く余に繼て彼の幽底を探らんと。ニウトン氏の如きは宇宙引力を始とし其他許多の学理を研究し今に其の名を垂るる程の大人学士なるも、而も尚未だ解し得ざる者多くして其学識の淺狭なるを歎きしなり。且<sup>そ</sup>夫学芸は倉廩<sup>注</sup>の如し。人々一粒一個の發明を積み漸を追ひ充<sup>あつ</sup>るを期するのみ。豈に一人一個の勞、能く之を充実するを得んや。故に学芸の田に耕し<sup>一</sup>理術の実を獲て以て此に收納するは人々の當に務むべき所なり。仏人某は陶窯の技を研究して妻子を飢餓に啼か<sup>一</sup>しめ、米人某は炭酸氣の毒質を試験して自ら其命を墜せり。是等の人こそ学芸技術に忠にして文世の豪傑とも稱すべけれ。嗟乎今の学士たる者心を斯<sup>こ</sup>に用ひずして徒に寡能短智<sup>一</sup>に誇り、之に倚て以て名利を求めんとす。滔々たるもの天下皆是なり。豈に歎ぜざるべけんや。人、国に生る故に国に尽すの義務あり。人、父母に育はるる故に父母に尽すの義務あり。人、学芸によつて幸福を得、豈亦之に尽すの義務なからんや。然り而して世人は國家に尽すの義務と父母に尽すの義務とを知つて而して独り学芸に尽すの義務を知らざるは蓋し何ぞや。若し國民にして國民たるの義務を尽さざれば其の國民たらざるを責め、人子にして人子たるの義務を弁へざれば其の人子たらざるを詰らば、学者にして学者の義務を知らざれば其の学者たらざるを尤<sup>よ</sup>むべきなり。然則苟も学芸を以て自ら任ずる者は、能く其義務を弁へ日夜黽勉<sup>びんべん</sup>刻苦し始めて一学士たるに恥ぢざるなり。豈に生徒を教育するの一事を以て足れりとせんや。<sup>二</sup>

(注) ニウトン氏 アイザック・ニュートン 一六四二—一七二七。

(注) 渺 はてしないさま。

(注) 倉廩 倉庫。

(注) 黽勉 精を出すこと。

問い一 傍線ア「学士」・傍線イ「寡能短智」について、文中におけるふさわしい意味を答えなさい。

問い二 傍線一「故に学芸の田に耕し理術の実を獲て以て此に収納するは人々の当に務むべき所なり。」の大意を文脈をふまえて説明しなさい(五〇字以内)。

問い三 傍線二「豈に生徒を教育するの一事を以て足れりとせんや。」とあるが、なぜそういえるのか、文章全体をふまえて答えなさい(八〇字以内)。

問題三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

何かモノを見るには、視点の確保が必要だ。肉眼でも、カメラを通してでもそうだが、何らかのモノを視覚で捉えようとするば、安定した視点が要る。生身の人体の場合、両眼を水平に保たないと、ひどくモノは見えにくい。両眼が水平でも、いわゆる股のぞきのようなことをすれば、世界はまるつきり違つた風に見える。人がモノを見ると、両目の下にあるもの、例えば平行する二本の足は重要だ。

またカメラの場合であれば、今度は三本の足、つまり三脚のようなかたちで、やはり安定した視点が確保される。それで露出時間が少々かかるが、ブレない映像を撮ることができる。このように、何かものを見るときには、見ている視点の下に、それを可能にしてくれる何かがある。つまり見ることのためには、何か土台のようなものが前提とされる。

視覚にかぎらず、他の感覚による認識一般にかんしても、こうした土台のようなものがしばしば想定されている。現に、認識の土台とか、認識論的な基礎とか視座とかいうことがよく言われる。あるいは、そんな小難しい用語でなくても、じっくり腰を落ち着けて話に耳を傾けるとか、腹を据えてじつと眼を凝らしてみるとか、そういう類のことが、日常の場で口にされる。どうやら認識のためには、それを下で支える何かが必要であるが、そうした支えとなる土台は、腹や腰など、安定・固定・不動・不変のようなイメージで語られることが多いようだ。認識論的革命とか切断とかいうこともよく言われるが、それらは滅多に起こらないから革命になるのであって、普段なら認識は、つねに変わらぬ何かによって支えられていると考えられている。

しかし、本当にそうなのか。モノをよく見るためには、じつとしていた方がいいのか。認識のためには不動の視点が不可欠なのか。逆に、運動が認識を可能にするということはないのか。動かないと、モノはよく見えないということはないのだろうか。その場合、支えとなるのは、腹や腰ではなく、足だ。ヒトの場合、二足歩行によって相対的に高い視点が確保される。さらに、歩くこと、ないしは走ることによって、視点を高く保つたまま、自在に移動することができる。そうした移動する視点によって、以前より容易に食物を獲得し、外敵から身を守ることができるようになったのだろう。運動する認識こそが、ヒトにとって生存の有利さ



をもたらしただけではないか。

ともあれ、一九世紀の生理学的心理学は、運動する認識の理論を用意し始める。例えばそうした学は、眼球の運動に注目する。眼球は実は絶えず動き、止まることを知らない。眼球は動くことによつて、盲点を回避し、視野を拡げ、奥行きを認識する。また視覚以外の感覚も、動くことによつて、より容易に空間のなかで認識される。例えば、人は実際に「耳を傾ける」。耳自体を動かせる人は少ないから、それ以外の部分を動かし、つまり体を傾けたりひねったりしながら、方向を定め、聴覚を働かせる。このように、認識を支えているのは、不動のものではなく、むしろ運動する何かである——当時の心理学はこのように考えつつあった。

テオドール・リボーの『注意の心理学』(一八八九)は、こうした一九世紀的心理学が獲得した知見を、きわめて明快かつ簡潔に示した書物である。この書を貫く基本命題はまさしく「運動なくして知覚なし」、リボーによれば、注意とは何よりも動的なメカニズムであり、筋肉の運動を伴う。注意は、たとえ静止というかたちをとる場合でも——例えば、視線を固定させるために、眼球が静止させられる場合でも——そこには静止をもたらすための筋肉運動がある。このように知覚のかたわらには、ごく微少な場合もあるが、かならず運動が存在するとリボーは考えた。

静止をもたらす運動とは、まさに逆説的な運動だ。不動のためには運動が必要になるということなのだから。しかし現に、安定した視点を獲得するためには、逆に動かなければならないことがある。例えば、対象自体が動くがゆえに、それを安定的に捉えるには、何らかの運動が必要になる場合がある。映画撮影においては、疾走する馬や車を捉えるために、カメラは予め作られたレールの上を滑らかに運動しながら、撮影が行われる。対象が動くのであれば、視点もそれを追つて動く。その場合、視点を支える基盤もいっしょに動かなければならない。視点は安定した基盤を保持しつつも、それでも移動しなければならぬ。あるいは、より正確に言えば、安定した視点を保持するためにこそ、あえて動かなければならぬのだ。

このような認識に伴う運動は、変化を常態とし、あらゆる対象が絶えず動き続ける近代においてこそ、鮮明に意識されるようになったといえる。対象が固定しており、認識が安定した基盤に支えられていたときには、そんな基盤に眼を向ける者はいなかっただろう。しかしながら、近代という時代においては、カントをはじめとして、認識を支える基盤は何かという批判的な問いを繰り

返すようになる。当初は、そうした基盤が動いているという自覚はなかったかもしれない。けれども、そうした基盤が、実際に見ている視点とはズレた場所にあることが、臆気おそろずながらに感じられたのかもしれない。いずれにせよ人は、認識の基盤に眼を向けるようになった。つまり認識について、それを可能にするものを認識しようとした。

かくして、認識の認識、つまり見ている者をさらに見るということが始まる。眼球の裏側では、小人ホムンクルスが網膜像を見つめている。鏡のなかの自分の眼を覗き込むと、自分の眼にも自分の姿が映っているのが見える。そんな風にして、無限や分裂におのきなながらも、認識を認識しようとする試みが始まる。

そうした試みは、一方ではカントのように、認識の形式や範疇はんちゆうを探るという超越論的方向に向かう。他方では、生理学的心理学的のように、内在的な方向に向かう。認識に伴う運動を捉えるということは、要は認識する身体を捉えるということだ。認識とは何よりも、身体に深く根ざしている——そうした想定のもと、認識の問題が考えられ始める。

ヨハネス・ミューラーは『人間生理学教本』(二八三三)で、視覚を徹底して内在的に捉えている。彼によれば、視覚という感覚は、外界からの光が眼に入って生じるだけではない。それは殴打や震盪しんどうなど、物理的な刺激によっても生じるし、薬物など化学的な刺激によっても生じる。この場合、視覚は身体の内側だけで生じる感覚であり、外界に存在する対象とは関係がない。また同じ頃、グスタフ・フェヒナーも、網膜残像の研究に取り組んでいる。残像現象において、わずかな時間ではあるが、眼の前にはもうない対象の像が異なる色で現れる。この場合も視覚は、外界の対象とは切り離される。

かつてであれば、そうした感覚の示すのはたんなる幻影で、認識などと到底呼べるものではないとみなされただろう。人間の身体はむしろ、認識を妨げたり歪めたりするものと考えられていた。その場合、認識とは究極的には真理の認識であり、神による認識だという前提があった。しかし一九世紀の心理学は、その前提をくつがえす。そこで人間の身体は、認識を妨げるものではなく、認識を生み出すものとして現れる。認識を受け取るものではなく、認識をつくり出すものとして現れる。運動とともに、そして身体とともに、認識は受動的なものから能動的なものへと転化する。

問  
い  
右の文章を、認識のあり方の変化を軸にまとめなさい(二〇〇字以内)。